害獣も天の恵みに変える管理放牧技術

今年最初の農村経営研究会を2月15日に開催した。講師はファームエイジ(株)社長の小谷栄二氏。小谷氏はニュージーランドの電気柵を使った管理放牧技術を日本に導入した人である。

小谷氏が指導する電気柵による管理放牧技術とは、放牧家畜の採食量に合わせた牧区を作り、常に牧草が最も栄養価の高い草丈15cm程度の段階で食べさせる。併せて牧草の再生を促し生産量を増大させる。さらに、糞尿還元も含めて放牧地という生態系を健全に保ち、土、草、家畜の循環を守っていくというもの。

こうした放牧管理によってトウモロコシなどの穀物飼料を大幅に減らすことが可能になる。糞尿処理の手間やコストも減り、しかも家畜が健康になるため事故率が減って、仮に乳量が減った場合でも酪農経営の収益性は改善されると事例を紹介して解説した。

小谷氏はニュージーランドと日本の試験研究機関などが共同研究として行なったサイレージの質を比較した調査結果も紹介してくれた。それによれば、ニュージーランドのサイ

レージは日本のものと比べて栄養化(TDN)がはるかに高い。日本のそれはカサだけが多いのだという。小谷氏はそれを「ニュージーランドでは若々しい竹の子を食べさせているのに対して日本ではいわば竹を食べさせているようなもの」なのだと言明した。

放牧で若い栄養価の高い牧草を食べさせるところに管理放牧の意義があるのと同様に、乾草やサイレージ作りでも日本では草丈を伸ばしてから収穫するために、草量は多くても栄養化の落ちた牧草を使うことになっていると話す。

僕は酪農や牧草生産に関してほとんど知識はないが、小谷氏の示したニュージーランドと日本のサイレージの栄養比較を見せられて唖然とせざるを得なかった。

こんな小谷氏を農村経営研究会の講師に呼んだ理由は、小谷氏が電気柵を使って害獣を森に封じ込めるだけでなく、電気柵で害獣を誘い込む罠を作って捕獲し、それを風土がもたらしてくれるタンパク源として経済的に利用する生態系管理システム(間引き管理)の技術を普及する活動に取り組んでいるからだ。その技

術と放牧による家畜飼養を組み合わせるから効果は大きい。

研究会のメンバーである福島県の降矢敏朗氏は放牧養豚を行なっている。また研究会のアドバイザーであるマート・テロワール協会会長でもある松尾雅彦氏は、放牧養豚に畜肉加工施設を組み合わせたスマート・テロワールを構築しようと言明している。研究会会員は、ほぼ全員が獣害に悩まされている。これらすべてが小谷氏の技術と風土管理の思想に結び付いていく。

会員外で参加していた千葉県の飼料販売業の方は、自分の商売とは矛盾すると言いながらも、顧客である畜産農家に情報を提供したいが府県の酪農・畜産には土地基盤が少ないとぼやいた。でも、1haで3、4頭は飼えると小谷氏も言うし、これからは高齢化の進行によって、府県でも農地が有り余るほど出てくるはずだ。

そして、機械化作業が不便で用途がない中山間地の水田であれば、積極的に放牧地として活用することで耕作放棄を減らせることも可能かもしれない。

まだ話は絵に描いた餅に過ぎないかもしれないが、どうすればそれが実現できるのか。それを我々の課題としようと話がまとまった。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。